



後醍醐天皇の南朝を最後まで支えた新田義貞（藤島神社蔵）

その第3皇子の茂仁親王は承久の乱後に後堀河天皇として即位した。頼盛一族は皇族の縁戚に連なり、後世に血筋を伝えたのだった。

## 源氏の名門・新田義貞 その名跡を継いだのは「自称」新田氏!?

後醍醐天皇に应じて鎌倉幕府を攻め滅ぼし、南北朝に分裂後は南朝の総大将格として最後まで戦った新田義貞。建武政権から離脱して北朝を建てた足利尊氏のライバルとして対照的に語られることも多い。

義貞は足利尊氏と並んで清和源氏の正統であったが、後醍醐天皇は尊氏を評価し、義貞は冷遇された。倒幕後、建武政権下の論功行賞では、尊氏が武功第一とされ、後醍醐天皇の名「尊治」から一字を与えられて尊氏に改名している。倒幕の立役者だった義貞は、尊氏の下位に列された。

後醍醐天皇が義貞よりも尊氏を優遇したのは、ひとえに家格に差があったからとされる。系図をたどれば足利氏と新田氏はともに源義家（八幡太郎）の子・義国の系譜を引き、足利氏は義国の次男・義康、新田氏は義国の長男・義重の子孫である。むしろ新田氏の先祖が兄、足利氏の先祖が弟なのだから、新田氏の方が上にも見える。

だが、鎌倉幕府において、新田氏は代々上野国新田荘に住み、地方の有力御家人という立場だったのに対し、足利氏は幕府内部で高い家格を確立していた。足利氏の当主は、執権として幕府の実権を握っていた北条氏から妻を娶る伝統があり、北条氏と縁戚関係を

### 新田義貞

(1301～1338)

清和源氏の流れを汲み、上野国新田荘を本拠とする新田氏の嫡流。後醍醐天皇の挙兵に应じて鎌倉幕府を攻め滅ぼす。建武の新政では鎌倉幕府下での立場を反映し、同族の足利尊氏より低位に置かれた。1335年に尊氏が後醍醐天皇に背いてからは、南朝方の中心として各地で戦い、越前国で戦死した。

### 源義家

(1038～1106)

河内源氏3代目棟梁。石清水八幡宮で元服し、「八幡太郎」と名乗った。父・頼義に従って前九年の役で安倍氏を討ち、のち陸奥守、兼鎮守府將軍に任じられる。後三年の役を鎮定すると東国武士の信望を集め、東国における源氏勢力の基礎を築いた。